

電 話

とても身近なモノをさてどうアレンジしましょうか？
まずは本選11作品をどうぞ。
惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は
「補足資料」にてお楽しみください。

つながり

宇宙まで突き抜けるような冬の空
一筋の飛行機雲がその空を二分した

携帯電話を持った
君との距離が縮まった
なんでも話そう

いつでも声が聞ける
僕らは分かり合える

だから手放さない

連絡が取れてさえいれば
君は安心なんだろう
僕を信じてくれるんだろう

僕らの距離は保たれた
でも、僕には少し遠かった

電話はいつも君から
夜遅く、僕が寝ても気にしない
君の声にテレビの音楽が重なる
番組で流れる曲が今夜のBGM
この前とは違う曲たち
CDの売り上げランキングが変わっていた
季節もいつの間にか変わっていた
変わるものと変わらないもの
僕は、君は、僕たちは・・・

「明日会いに行くよ」

月に照らされた空
春風に押された雲がゆっくり流れている

271828828459045235360287471352

俺の家には、どういうわけかよく間違い電話がかかってくる。

そして中にはちよつと面白かったり、思わずツツコミを入れたくなったり、軽くキレそうになる応対をするヤツもいるわけだ。

ちよつと前にこんなのがあった。

俺 「はいもしもし、山崎です」

相手 「……………（小声で）あつ、やべ間違えた『ブツツ』」

聞こえてんだよつ……！一言ぐらい謝ってから切れつ……！

あとこんなの。俺が電話に出た瞬間、上ずった男の声で

「あ、あの、高子さんっ！僕とけ、けつ……けつ献血にいきませんかっ？」

いるんだなーいまどきこんな漫画みたいな緊急回避をしようヤツ。

なんか番号間違えてますよというのもなんだったから、やたら野太い声で

「ぼ、僕なんかでよろしければ」って言ってみたら相手真っ青な顔して（といっても電話口だから顔見たわけじゃないから想像だけど）『がちゃんっ』と電話切っちゃったよ。いやーおかしかったねーはっはっはっは

……………つて

だから何も言わずに切るなっ……………！

それから相手が出たらまずは誰か確認しろっ……………！

どんな大事な電話でも間違っかけてけるという事態を想定の範囲内に入れやがれっ……………！ まあからかった俺が悪いのかもしれないが

後困るのが留守番電話の間違い電話だな。その場で間違いだって言えないから何度も留守メモが入ってたりしてうつとおしいったらない。でも、内容がちよつと「えっ？」ってなるのが時々あったりするんだよな。例えばこんなの。

「（ピーツ）あ、もしもし、笹川さんですか？ご注文の三角定規一年分届きましたんで、明日発送いたしますね。それじゃ失礼いたしますー」

……………一年分ってどれくらいだ？

「ふう……」

どきどきと胸を打つ心臓の音がやけにうるさく、私は小さく息をついた。

「まだかな……」

置かれた受話器に右手を添え、電話機の前で真剣な顔して正座で待機。私は今、そういうあまりにも不自然な格好で、一本の電話を待っていた。

タイムリミットはワンコール

思い返せば、その習慣が始まったのは高一の冬だった。初めての彼氏が出来て三ヶ月。毎日が楽しくて、嬉しくて、その分、切ないことも寂しいことも増えて。それを埋めるように、毎晩携帯で彼と電話しては、おもしろいテレビ番組とか、好きな音楽についてとか、学校であった出来事とか、そういうたわいも無いことばかり話して過ごしていた頃。きっかけは、彼のある提案だった。

毎月十五日に届く、オレンジ色の封筒。請求書在中。ラブ定額とかソフトバンクとかが無かった時代に、毎晩携帯で電話していたら、そりゃあとんでもない額になるわけで。お互い、高校生の限られたバイト代から出すにはかなり苦しく、親に頼り、同じように怒られた。そう、その『提案』とはそれに対する苦し紛れの策だった。

家電、『かでん』ではなく『いえでん』と読む。字のまんま、携帯ではなく家のごつい電話のことだ。これは、通話料が携帯とは比較にならないぐらい安い。つまり、彼の提案と言うのは、携帯ではなく、今度からは家電を使おうぜというものだった。ここで、『電話はもうやめよう』だとか『メールで我慢しよう』という考えが全く出てこなかったのだから、うん、若さとは恐ろしい。家電初日の夜は、本当に舞い上がっていた。家族はもう皆寝静まった。子機が無いので仕方なく居間に移動し、こたつに潜り込んだ。これで時間を気にせず彼と話ができると思うと、幸せのあまり受話器のコードのグルグルを全部伸ばしきってしまいそうだった。

そして、十二時。約束の時間に——事件は起こった。

大音量で家中に響き渡る、ロンドンばしおちたーのメロディ。慌てて受話器を取ったものの、時既に遅し。親の起き出す音が聞こえ、『ごめん、メールする』とだけ囁き、私は電話を切った。親には『間違ひ電話だったよー』と言ひ、誤魔化した。正直、冷や汗だらだらだった。

初家電がそんなだったので、二回目からは計画を立てた。電話の前に、まず携帯にワンギリ。その十秒後きっかりに家電にかける、というものだ。もちろん、前もって着信音量を一番低くしておくのも忘れない。一回、消音にしようとして出来ないことに気付いた。当たり前だ。家電がマナーモードでぶるぶる震え出したら怖い。数日後には、ほぼ無音で電話に出られるようになった。こうして、私は快適な家電ライフを無事手に入れ、毎日それを満喫したのであった。

……翌月のNTTからの請求書は無情だった。家電でもやはりオールで電話はまずかつたらしい。彼は超怒られ、たったの一ヶ月で、また私たちは電話する手段を失った。

それから、仕方なくメールに専念することになった。付き合いが長くなるにつれ、いつでも声が聞きたいという欲求が無くなってきたのも、理由の一つかもしれない。けれどそのおかげで身についた、毎晩どちらかが眠るまでメールをする、という新習慣は、私たちが大学生になり、一人暮らしを始め、気軽にお泊りが出来るようになってからもずっと続いた。

そして今、私は家電の前に正座している。きっかけはやはり、彼の『提案』だった。

携帯が、短く震えた。息を整え、ゆっくり十秒数える。三年ぶりのこの感覚がすごく懐かしい。もう通話料も着信音量も気にしなくて良い。けれど、どうしても胸のドキドキは収まらなかった。八、九、十——と同時に右手を上げる。受話器越しに、聞き慣れた優しい声が聞こえた。

『さすが、職人の腕は変わってないな』

「当たり前でしょ」 そういえば、思い出した。この電話の出かたの、もう一つのいいところ。

「親が起きると怒られるじゃん……あははっ」 あと、それに——ね、

こうすれば、一秒でも早く、貴方の声を聞くことが出来るんだよ。

私は、パパに隠れて電話を掛けた。

secret telephone

これが普通なのかどうかは知らないけど、うちが片親で、厳しいのは事実だ。カレに会うのはもちろんのこと、電話すら禁止されている。そこまで制限されるいわれはないし、携帯電話を利用すればこっそりと可能なので、親の前では少なくとも従う素振りを見せている。

親が寝静まった真夜中。私は電話帳で番号を引き出す。

話がしたい。

声が聞きたい。

たったそれだけのことなのに、私にとってはとても重要なことで。

ここ三週間ほど彼とは会っていない。もちろんカレが忙しいのが理由の一つだが、それ以上に監視が厳しくなったからである。

だから、今日こそは《デート》の約束をしたかった。

表示される番号を確認して、通話のボタンをゆっくりと押した。



「もしもし」

『ああ、恵子か。何か用か？』

「いや、そういうわけじゃないんだけど……もしかして寝るところだった？」

『そんなところ。でも、大丈夫なのか？ もし見つかったら——』

「大丈夫。そもそも禁止される理由が分からないし」

『そうか』

「それよりも、今度の日曜日は暇？ だったら会おうよ」

『了解。今度の日曜日ね』

「詳しくはまた電話するから」

『メールはダメなのか？』

「別にいいけど……声が聞きたかったから」

『……悪い』

「仕方ないよ。じゃあ、切るね」

『ああ』

「ばいばい————パパ」

メリーさんの電話

今日は朝からあいにくの雨。青年は何をす
るでもなく、アパートの自室で一人時を過
していた。

雨足が強まり、遠くに雷鳴が聞こえ始めた
頃、青年の携帯に一本の奇妙な電話が届いた。
携帯の画面に、発信者の名前も、番号も、非
通知の文字さえ表示されてない電話。不思議
に思いながらも彼は電話に出た。

「もしもし？」

「……………」

応答がない。やはりいたずら電話だったのか。
そう思い電話を切ろうとしたとき、受話器の
向こう側から声が聞こえてきた。

「……あたし、メリー。今あなたのところに行くわ

……。」

言って電話は切れた。一瞬彼の体に悪寒が
走った。

(まさかな、悪戯に決まっている。)

そう思いながらも嫌な気持ちが拭いきれな
かった。

—ブルルルル　ブルルルル

不意に彼の携帯が鳴り、体が強張った。

「……はい、もしもし？」

「……あたし、メリー。今タバコ屋の角にいるの
……。」

「ふざけんな、誰だあんた！こんなくだらな
いことして——」

しかし既に電話は切れていた。

(タバコ屋？　そういえばここから少し行っ
たところにタバコ屋がある。偶然か？　それとも
……)

雨は更に勢いを増し、雷もその激しさを増
していた。謎の発信者からの電話。男の中で
次第に恐怖が膨らんでいった。彼は二度とあ
の電話がかかってこないことを願った。

—ブルルルル　ブルルルル

三度男の電話が鳴った。果たして、あの電
話であつた。再び男は携帯を手を取った。

「……あたし、メリー。今〇×小学校の前よ。も
うすぐ着くわ、あなたのお家……。」

「あああああああ。」

〇×小学校はここから最も近い学校である。
電話の主が何者か。もはや疑いの余地はなく、
恐怖が叫びとなってもれ出た。都市伝説『メ
リーさんの電話』はその結末が明らかでない。
そのことが男をさらに苦しめた。

(嫌だ嫌だ嫌だ　来るな来るな来るな……)

—ブルルルル　ブルルルル

男の恐怖心を煽るように、無機質な電話の音
が再び部屋に鳴り響いた。男は電話に出た、
これが最後の電話とは知らずに——。

「……あたし、メリー……んだけど、ちょっと

聞きたいんだけどね、あなたのうちはあのー、
ローソン曲がったとこのあの茶色いやつ？」

「………は？……え、あ、いやうちはそこでは
ないですけど……。」

「うわー、しくった。家間違えた。メリー超
ショック！　幽霊の恥だわー。あつ、じゃあさ
あ今からそっち行くから住所を……あつやべつ、
電池切れ」　ブツツ……

ツー　ツー　ツー　ツー　ツー

まだか

今、十二時五十分になった。

受話器の前で息子からの電話を待っている。合格発表は午後一時のはずだ。もう一時間も前に息子は大学に向かった。あれからずっと電話機の前でじっと待っている。

十二時五十一分になった。

あと9分で発表だ。息子は、テストは結構できたと言っていた。でも心配だ。早く1時になって。

十二時五十二分になった。

あと8分。緊張してきた。息子は一年間ずっと第八戒大学を目指して勉強してきたんだ。だから絶対に受かってくれるはずだ。

十二時五十三分になった。

あと7分。今頃、もう息子は大学に着いているのかな。ひよつとしたら、もう発表されているのかもしれない。ってことは、息子はもう結果を知っているのかな。もうそろそろ電話がかかってくるはずだ。

十二時五十四分になった。

「明日も見てくれるかな？いいともー」テレビの中では、いつものようにお昼の番組が終わった。そろそろ電話が鳴るはず。心臓がバクバク鳴ってきた。受かっていてくれ。

十二時五十五分になった。

もう結果が発表されているだろう。ということは、息子はもう結果を知っているだろう。もうすぐ電話がかかってくるはずだ。

十二時五十六分になった。

まだ電話が来ない。息子は結果が分かったらすぐに電話すると言っていたのに。ひよつとしてダメだったのかなあ。

十二時五十七分になった。

まだ来ない。やっぱりダメだったんだ。そういえば、今日の朝は息子、元気なかったなあ。テスト本当はあまりできてなかったのかなあ。

十二時五十八分になった。

ハア。電話来ない。やっぱり受からなかったのかなあ。

十二時五十九分になった。

未だにかかってこない。ひよつとして今頃、不合格になって落ち込んでいるのかなあ。まだ後期があるのだから。一年間頑張ったのだから、きっと後期は受かってくれるはずだ。

十三時になった。

テレビの中に小堺さんが出てきた。息子からの連絡はまだない。電話がかかってくたら、なんて言って励ましてあげようかなあ。ええっと。何て言ったらいいのだろう。「残念だったね」いや、これだとさらに落ち込んでしまいそうだ。ええっと……。

ジリリリリリ　ジリリリリリ

あつ。かかってきちゃった。なんて言っただけよう。

「もしもし」　「あつ。お母さん？　大学受かったよ」

「えっ？」

分かりにくいよ

『新しいメッセージが 一件 あります』 ピーツ

「…こちら、ラコーム化粧品のご説明をさせて…どうぞ、お付き合いくださ」 ピツ
『メッセージは 以上です』

はあ…。まったく、何て事をしたんだか。一足先の世紀末が、私に來たみたい。
あれがもし、家族の人に聞かれてしまったら…。

☆

彼が、ずっと前から好きだった。今まで思い悩んだ末に、電話で告白する事にした。
面と向かうと、絶対にあがつてしまう。そしたら、言いたい事の半分も言えないだろう。
手紙は…私の字は、汚いから却下。
電話でなら、この想い、伝えられる。多分。

舞台は、近くの公衆電話。

自宅だと、家族に聞かれてしまうので嫌だった。

家の人が出るだろうから、彼に代わってもらおう。その予定だったんだけど……。
どきどきしながら、呼び出し音を聞いていると、いきなり彼の声がした。あせった。
それが留守番電話の応答だと、やっと思い当たった時には「メッセージをお願いします」とささやかれた。ここでまた慌てた。それもこれも、彼の言葉だから、いけないんだ。
さっさと切っちゃえば良かったのに、そんな機転も利かず、しどろもどろになりながら、
「こ、小村君のことが、す、す、好きです！」

どこの世界に、家族も聞かもしれない留守録に、愛の告白を入れる子がいるんだろう。
受話器を置いてから、そう思ったけど、もうあとの祭り。
大失敗だ。

とぼとぼ、暗い家に帰ってみると、留守番電話のランプが点滅していた。私の家族は
出かけたようだった。彼からもう返事かと思いきや、駆け寄って見たら業者だったので
速攻で消した。

☆

はあ…。ホント、何て事をしたんだか。

穴があつたら、逃げ込んじやいたい。それで、二度と出てきちゃダメね。あんなのを
聞いて小村君、一体どう思うんだろう。彼自身、お茶目なところがあるから、わらって
面白がつてくれるかな。って、彼のいたずらは外してるときが多いんだけどね…。ふふ、
付き合うようになったら、なつたで苦労しそう…。いやいや、妄想してる場合じゃないわ。

☆

とりあえずは、甘いココアを頂きましょうか。

……悩むのは、そのあとにしよう。

(…こちら、ラコーム化粧品の…)

なぜか、さっきの業者の電話が、頭を過ぎった。

~~~~~

「もしもし？」

留守番電話サービスに接続します――

## 遠距離恋愛

今日も彼の携帯は留守電に繋がる。

最後に話したのは一週間くらい前だろうか。彼は私に電話を全くしてこないし送ったメールに返事もない。

彼とは高校が同じだった。「大学に入ったら留学して法律の勉強をしたい」と彼は昔から言っていた。夢に向かって頑張る彼を私は好きになり、私たちは付き合い始めた。

私たちはそれぞれ別々の大学を受験し、お互い見事第一志望に合格した。でもだからといって彼とのラブラフが待っているなんて当然思わなかった。彼は留学を望んでいたし私もそれを応援していたから。

彼は入学して少ししたらすぐに外国へ発った。彼との連絡手段は携帯電話だけ。かなりの時差があるけど、はじめのうちは頑張って夜中まで起きていたり、彼も明け方早く起きて電話をしてくれたりしていた。リアルタイムで連絡がとれることは一日に一回しかなかったけど、私はそれでも満たされた。彼の声を一度聞くだけで幸せになった。

時が経つにつれて段々彼との連絡が少なくなっていた。彼から私にかけてくることはほとんどなかったし、私が電話をしても「ごめん、ちょっと疲れているから」といつてすぐに切るようになった。メールを送っても勿論すぐには返ってこないし、暫くしてから返信が来ても内容は淡白なものだった。

彼が自分の夢に妥協をしないということとは知っていた。自分がやるべきことは完璧にやる人だし私は彼のそういう所に惹かれたから。

でもそしたら私はなんなんだろう？常に携帯電話

を肌身離さず持ち歩き、メールをチェックし、着信履歴をチェックし、彼からの連絡が無いことを確認して不安を感じることの繰り返し。今彼は何をしているのか、私にもう愛想が尽きたのか、他に好きな人が出来たのか、そんなことはばかり考えてる。

ふと思った。本来どこでも連絡をとることが出来るための便利な手段として存在する携帯電話に何故私はこんなにも左右されているんだろう。安心を促すための機械に不安を煽られてる。こんなんじや駄目だ。もっと自立しよう。こんなに依存する私を彼が好きになつてくれるわけがない。

そう思い私は携帯電話の電源を切つて机の引き出しに閉まった。

私は一生懸命勉強をした。余計なことを考える時間が無いようにバイトも目一杯入れた。

充実した日々を送り始めて二週間くらい経つてからだろうか。バイトが終わり帰宅すると玄関の前に人が立っていた。

「おかえり。遅かったね。」

そこに立っていたのは彼だった。私は我を忘れて彼に抱きついた。彼は私を抱きしめ、そつと頭を撫でた。

「どうしてずっと連絡してくれなかったの？」

「うちに戻る資金を貯めるためにずっとバイトをしてたんだ。だから全然連絡してやれなかった。ほんとにごめん。でもどうしても今日だけは前と過ごしたかった。お前に内緒で今日来てびっくりさせてやりたかったんだ。誕生日おめでとつ、理紗。」

それを聞いて私は今日が自分の誕生日だったことに初めて気づき、涙を流した。彼がこんなに自分のことを思ってくれているなんて考えもしなかった。私はただ形として見えるものだけから彼の愛を判断していた。

携帯電話なんか要らない。機械では実現できない繋がりを二人の間に見つけられたから。

## 緊急指令、サンタを追え！

クリスマスイブ。サンタクロースが今ごろどこを飛んでいるか、いつ自分の枕もとにやってきてくれるのか、皆さんは気になって眠れなかったことってありませんか？ たった一夜で世界中の子供たちにプレゼントを配ってまわるサンタクロース、彼はいったいどんな風に世界を飛び回っているんでしょうね。

実は、12月24日から12月25日までサンタクロースの動きを追跡し、サンタの居場所を「一刻」示すと同時に、サンタの旅の様子を映像で見せてくれるホームページがあるんです。

NORAD（北米航空宇宙防衛司令部）の専用サイト、「NORAD Tracks Santa」というホームページがそれです。NORADというのは、最新の技術と機器を使い北米大陸に侵入しようとする航空機の監視や、世界中で発射されるミサイルを探知することを任務とするアメリカ合衆国とカナダの二国軍隊組織です。つまり、このホームページに掲載されている情報は全てアメリカとカナダの両政府のお墨付きの情報なわけです。

さて、それではこの組織、どのようにしてサンタの動きを追跡しているのでしょうか。これがまたじつは随分と大掛かりかつ近代的なもので、まず、北警告システムと呼ばれる北米大陸沿岸部47ヶ所に設置されている強力なレーダーシステム群で北極を発射しようとしているサンタを探知します。そしてサンタが発射したのをレーダーが捉えた瞬間から、待機していた本来弾道ミサイルの警告と追跡に使用するサテライト、つまり偵察衛星で上空22,300マイルの静止軌道上から高感度赤外線感知器でサンタの熱源を追跡します。その際、サンタ自身の体温を追うのではなく高熱を発しているトナカイの赤い鼻の熱を追うんだとか。どうやら歌に歌われているトナカイの鼻の話は本当みたいです。すね。

そしてその追跡データをもとに、あらかじめ世界中の多くの場所に設置しておいた高速高解像度の暗視装置付デジタルカメラでサンタとトナカイ達が世界中を旅する様子を捕らえ、その映像はすぐに世界中の人達が見れるようにリアルタイムでホームページにダウンロードされます。さらには各地の空軍基地から各種偵察装置を搭載した偵察型のジェット戦闘機がスクランブル発進してサンタと接触、歓迎の意を表してエスコートします。これがクリスマスの夜に繰り広げられるサンタ追跡劇の一部始終です。なんだかもう夢があるんだかないんだかわかりませんね。

このサンタの追跡、すでに50年以上もの歴史があるのですが、きっかけはなんと一本の間違い電話からでした。1955年に「サンタと直接話ができる」という広告を出した店が、不注意にもホットラインの電話番号を間違えてしまいました。そしてそれは偶然にもNORADの前身、CONAD（中央防衛航空軍基地）長官の電話番号だったのです。子供たちからの電話をとったCONADのハリー・シャープ長官は最初は困惑しましたが、すぐに事情を察して機転をきかせ「サンタは北極から南に向かったことをレーダーで確認したよ」と答えました。そうして、この伝統が始まったのです。

その伝統はCONADがNORADに再編された後も受け継がれ、NORADは北米大陸の安全だけでなく子供たちの夢も守り続けているのです。たった一本の間違い電話から始まったサンタ追跡プログラム。今年のクリスマスにも実施される予定です。

## 愛されるメール

携帯電話が登場してから、友達との関係が変わった。携帯電話があるおかげで、より仲良くなった友達がいる。

これまで以上に、緊密に連絡が取れるようになったからだ。

いつでも好きなときに連絡が取れる。

これは、革命だ。

携帯電話のない生活なんて、もう考えられない。

それほど、携帯電話は、私の生活に欠かせないものになっている。

一方、携帯電話を使うようになってから、二度と埋められない溝ができてしまった友達もいる。

電話番号とメールアドレスを交換したものの、とりたてて話すことは何もない。

いつでも連絡を取れるということが、逆に距離を作ってしまった。

そこそこ仲がいい友達とは、こうなりがちだ。

しばらくメールのやりとりをしていないと、もう何を送っていいのかわからない。

突然向こうから送られてきても、何を書いたらいいかわからないので、ずるずると返信を先のばしにしてしまう。

結局、タイムオーバーになって、メールが届かなかったふりをするようになる。

その人とは、もう二度と口をきくことはない。

後日、面と向かって確認するのは、野暮というものだ。

だから、その人との縁は、そこで終わってしまう。

たった1度、タイミングを逃しただけで、すべてが終わってしまう。

これが、携帯電話の怖いところだ。

だから、私はこまめに携帯電話をポケットから取り出して、メールを確認する。

少し返信が遅れただけで、怒っていると思われるからだ。

相手が、嫌われてしまったと思うかもしれないからだ。誰だって、好きな人には、最速で返信する。

すべてに優先して、返信するからだ。

だから、好きな人とのやりとりは、ほとんどチャット状態になる。

口では言えないことも、メールなら言える。

こうして、2人は急速に接近していく。

しかし、逆も真なりで、別れることになるのも、早い。

口で言えば何でもないことでも、文字にすると、キツクなることがある。

精神的ダメージは大きい。

好きな人からなら、なおさらだ。

しかも、文字は、半永久的に残る。

そのメールを読み返すたびに、心の傷が開く。

(こんなはずじゃなかった・・・)

そんなメールは消してしまえばいい。

送った方も後悔している。

(どうしてあんなこと、言ってしまったのだろう・・・) だから、イヤなメールは、即削除して、見なかったことにしたらいい。

そして、全然関係のない話をしてあげたらいい。

向こうから、「怒ってない？」と聞かれたら、こう言ってあげればいい。

「えっ。そんなメール来てないけど。それよりさ、今日ね、こんなに面白いことがあったんだ。聞きたい？」って。

何でもかんでも、まともに返していいわけじゃない。

これは、頑張りすぎてしまう人によくあるミスだ。

誰だって、思ってもいないことを、つい勢いで言ってしまうことがある。

たとえ、それが、大好きな人であったとしても。

こういうときにこそ、見なかったふりをするんだ。

見なかったふりすることによって、縁が切れてしまうこともあれば、逆に続くこともあるんだね。

理由も無く声が聞きたくて

そつと携帯に手をのばす

名前を見つめて

掛ける理由を探してる

恋人なら

理由なんて要らないのに